

岐阜市は斎藤道三や織田信長など名高い戦国武将が活躍した舞台です。道三・信長は何故岐阜市を選んだのでしょうか？英雄たちが欲しがった岐阜！その歴史を作ってきた武将や武士団、彼らの知られざる活躍と一緒にひも解いていきましょう。身近なところにある歴史が、新たな気付きにつながるかもしれません。

岐阜城の戦いで活躍した中島伝右衛門



岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護課 内堀 信雄
特任研究員

プロフィール
昭和34年 栃木県宇都宮市に生まれる
昭和61年 名古屋大学大学院文学研究科(考古学)卒業
岐阜市教育委員会にて信長公居館跡発掘調査などを担当。
主な著書
『東海の名城を歩く 岐阜編』(共編、吉川弘文館、令和元年)
『戦国美濃の城と都市』(高志書院、令和3年)

令和8年4月23日、「中島両以記文」という文献史料と関連墓石が岐阜市の文化財に指定されました(指定名称「中島両以記文附中島家一石五輪塔群」)。今回は文化財指定を祝して「記文」に記された中島伝右衛門という武将の慶長5年(1600)8月23日の岐阜城の戦いにおける活躍をご紹介します。

1 中島両以とは

中島両以(1604～1676年)は先祖を長良(岐阜市)在住の「地侍」(ふだんは農業に従事し有事の際は軍役を勤めるもの)に持つ近世初期の商人です。はじめ京都に住んでいましたが、元和5年(1619)16歳のとき長良に移り、地主経営・質商・醸造業などを経て、寛永14年(1637)に尾張藩の御用材木商に転身して成功します。晩年には北海道・津軽から大阪まで活動範囲を広げて材木・茶などの商品取引をおこない、一年の売上金が一万両に及びました。

2 「中島両以記文」とは

「中島両以記文」(以下「記文」)は延宝3年(1675)4月に72歳の中島両以が書いた記録で「中島由来書」と「両以誕生より七拾一歳迄之由来書」の2巻で構成されています。前者は中島家代々の由緒と長良・大桑・岐阜などの由来を記しており、信濃国飯山藩(長野県飯山市)藩主松平忠俱の家臣で両以の遠縁にあたる中瀬治兵衛の求めに応ずるとともに子孫のために書いたものです。後者は中島両以の生涯を商人としての活動を中心に記しており、同じく子孫にあ

てたものです。

「記文」はこれまで戦国末期から近世初期にかけての地侍の変容や商業史の研究に史料として用いられてきました。また戦国期美濃国守護土岐氏や戦国大名斎藤氏・織田氏らの拠点(城・城下町)変遷の研究にも役立てられています。

3 中島伝右衛門奮戦の記憶

両以曾祖父願永母の兄弟の子孫が中島伝右衛門と推定できます(図1)。伝右衛門は信長側近の菅谷九右衛門(菅屋長頼)、ついで西国の龍造寺(隆信)に仕えたのち、母衣武者として岐阜城主織田秀信に

仕えます。

慶長5年(1600)8月23日の岐阜城の戦いでは西軍についた秀信の命で上ヶ格子門に配属されます。東軍の猛攻を受けて多くの味方が撤退する中、伝右衛門は上ヶ格子門を死守しますが、東軍細川忠興の家臣河村(沢村)才八と鎗どうしで戦っていたところ、「助槍」(鎗の加勢)があつて討死してしまいます。戦後、伝右衛門が上ヶ格子門を堅固に守り討死したのは「無類之働」であると敵味方を問わず評判になりました。

岐阜城の戦いを描いた軍記・合戦図には岐阜城天守のすぐ横に、伝右衛門を伝左衛門とするなど若干の違いはあるものの、「記文」と良く似た記述・描写がほぼ例外無く見られます(図2)。この種の合戦図は展覧会でしばしば展示されていますので、機会があれば絵図の岐阜城天守近くに記された中島伝右衛門(中島伝左衛門)の名前を探してみてもいかがですか。

※次回は2026年8月号です。お楽しみに

※(参考文献)●伊藤忠士「近世初期「商人」の性格」「近世領主権力と農民」吉川弘文館、1996年、「岐阜市史史料編近世」岐阜市、1976年

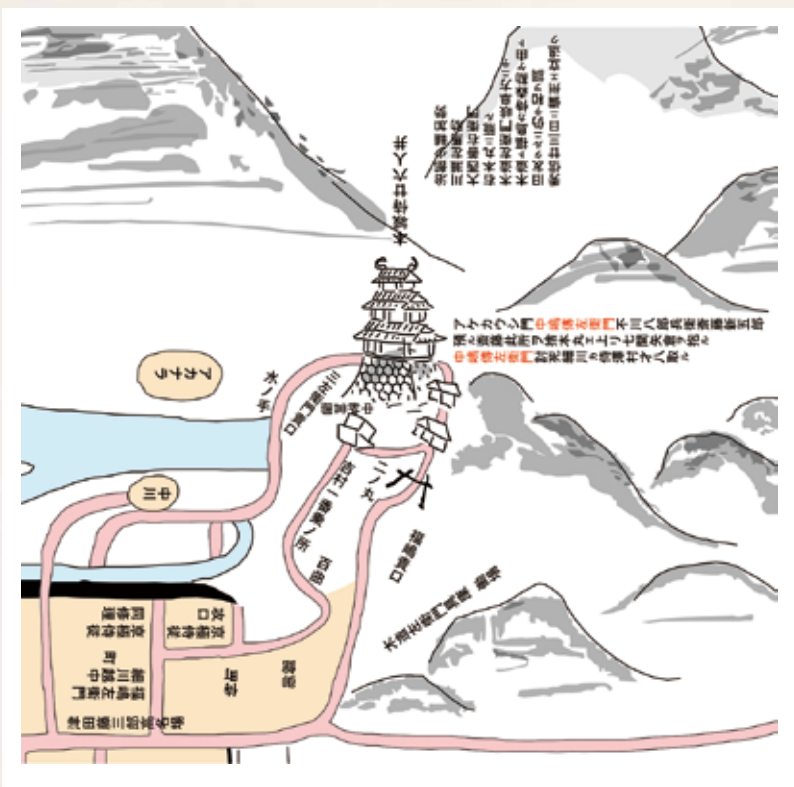


図2 「関ヶ原御陣之図」岐阜城攻め箇所(中島傳左衛門名を赤字で表記)
※岐阜市歴史博物館所蔵図の一部を翻刻

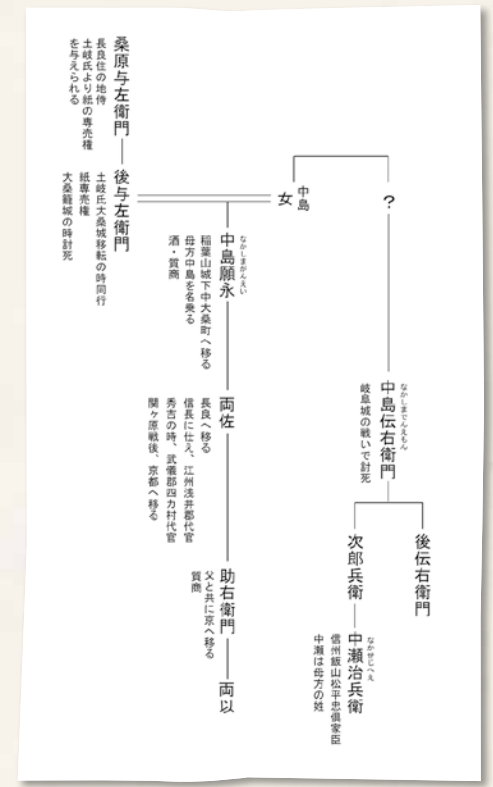


図1 中島家系図